

知的障害児に対する性教育について

—養護学校における指導の現状と教員養成カリキュラムの必要性の検討—

西 田 充 潔
田 実 潔

目 次
はじめに
I. 調査 1
1) 目 的
2) 方 法
3) 結 果
4) 考 察
II. 調査 2
1) 目 的
2) 方 法
3) 結 果
4) 考 察
おわりに
資 料

はじめに

昨今、知的障害児に対する性教育の必要性と重要性はますます認識されてきている。本来、性教育指導に際しては、いわゆる「セックス教育」と「セクシャリティ教育」の両面にわたる指導が求められる。「セックス教育」とは、端的に述べれば性の生理的メカニズムを中心とした性の科学知識を解説するものであり、「セクシャリティ教育」は、「性教育は、単に性器の構造、機能や、それにかかわる性行動についての教育ではない。更に幅広い概念を持つ『ヒューマン・セクシュアリティ』の教育である」(日本性教育協会、1990)と

されるように、「セックス教育」よりもさらに包括的な人間教育としての概念を表した言葉である。このような両面性あるいは多面性が要求される性教育においては、教育課程としての教科指導や生活指導の枠組みを超えた教師らの連携による総体的・体系的な指導・対応が求められる(前田、1997。尾原・木村、1998)。

知的障害児に対する性教育についても、本来的には上記の理念のもと、同様の指導が行われるのが望ましく、また必要なことである。しかしながら、知的障害養護学校においては、多くの教師が指導の必要性を感じつつも、実際に指導を行うに際しては困難を訴えている(木村・尾原、1998)。指導の困難の要因として、子どもの発達の個人差、本来プライベートな性行動を指導することの難しさなどがあるとされている(児嶋ら、1996)。

子どもは公共の場における振る舞い方といった常識的行動というものは、大人の振る舞い方を見て真似しながら覚えるとともに、自らの行動に対する他者(大人たち)の対応から行動の有り様を認識しているものと思われる。そういった意味から、本来プライベートなものであるはずの性行動を知的障害児が公共の場で行った際には、大人である教師たちの対応は、知的障害児の性的モラルや行動規範を直接・間接に左右するものとなると考えられる。すなわち、学校生活における教師個々人

キーワード：知的障害児，性教育，知的障害養護学校，教員養成カリキュラム

の対応が子どもたちへの実質的指導としての意味を持つ。これまでは、性や性教育に関する教師の意識と指導内容との関連についての研究（例えば、木戸ら，1998. 江田ら，2000）や、カリキュラムとしての性教育授業の実施が子どもの問題行動の変化にどう影響するかといった研究（例えば、児嶋ら，1996）が行われてきた。しかしながら、子どもの性的行動とそれに対する教師の実際的対応との関連に着目した検討はなされてこなかった。

ところで、性教育指導を実際的に難しくしている他の要因として、指導内容の不明確さ、指導方法の不明瞭さといったことが挙げられる（児嶋ら，1996）。このことは、先述した性教育の理念を、知的障害児に対する指導として具現化することに困難さを伴っていると考えられる。つまり、教師は知的障害児に対する性教育をどのように考え、実際に具体的にどのように指導すべきかに戸惑いと不安を抱えながら、日々の指導にあたっているのである。

教員養成課程を有する全国の大学では、性教育の意義や子どもの性的な発達への指導法といった性教育法に関する系統的なカリキュラムは以前よりほとんどみられず（武田，1979），近年になってようやく大学生に対する性教育の延長としての実験的試みがなされてきているにすぎない（石井ら，1992. 石原・早川，1993. 益子，2002）。そのため、現職の学校教員たちは、大学の養成課程においては知的障害児に対する性教育指導の考え方やその実際の指導法を何ら学ぶことなく教壇に立つこととなり、日々の教育実践の中での個々人の経験に依拠しつつ、現職教員に対する各種の研修等によってようやく指導法を培っているのが現状であろう。

以上のことから、本研究は知的障害児に対する性教育指導の現状を明らかにするとともに、大学における教員養成カリキュラムとしての知的障害児に対する性教育指導法の必要

性を検討することを目的とする。

I. 調査 1

1) 目的

調査 1 では、知的障害養護学校において現状としてどのような性教育指導が実施されているのかを調査する。その現状を踏まえ、性教育指導の必要性を教師はどのように認識しているのかを検討する。さらに、性教育指導の必要性についての教師の認識と学校生活における子どもの行動への対応との関連について検討する。

2) 方法

対象と手続き：

調査の対象は、北海道内の知的障害養護学校 3 校に所属する現職教員であり、3 校あわせて 166 名であった。2002 年 9 月から 10 月初旬にかけて質問紙調査を実施した。質問紙は、各学校内の特定の教諭宛に必要な部数をまとめて郵送し、その教諭から学校内の全教諭へ配布し回収してもらった。個々の教諭からの質問紙は、記入者によってそれぞれ個別の封筒に密封の上で回収してもらった。あわせて 103 名から回収され（回収率 62.0%）、不十分な回答を除く 99 名（男 40，女 58，不明 1）を分析対象とした（有効回答率 59.6%）。所属学部は小学部 37 名，中学部 35 名，高等部 27 名であった。年齢は 20 歳台 21 名，30 歳台 46 名，40 歳台 25 名，50 歳台 5 名，不明 2 名であった。

質問内容：

質問紙は、「対象者の個人属性」，「性教育指導の実施状況」，「性教育指導の必要性」，「子どもの行動への対応」，「障害者の性について」の 5 つの領域についての全 92 項目からなった（資料 1 参照）。

3) 結果

性教育指導の実施状況：

99名中42名(42.4%)が「性教育を実施している」と答えた。所属学部による比率の差は有意ではなかった($\chi^2=1.996$, $p=.369$)。このうち「学期に1回」実施していると答えたものが8名、「年に1回」が2名、「年に2回」が5名と、約三分の一が定期的に指導を実施していた。他は不定期の実施であった(表1)。指導の形態としては「クラス全員に対して」の指導形態が25名(59.5%)と最も多く、「発達別グループの一部に対して」は3名(7.1%)であった。また「性教育を実施している理由」を複数回答で尋ねたところ(表2)、「子どもに現在必要だから」が最も多く26名(61.9%)、次いで「子どもに将来必要だから」が25名(59.5%)であった。指導の実施内容を表3に示した。所属学部による違いがあるものの、総じて「清潔」41名(97.6%)、「用便」33名(78.6%)などの基本的スキルや、「男女の違い」31名(73.8%)、「身体のおもしろく

み」24名(57.1%)など性別による生理的な違いについての指導が多かった。特に中学部以降では、「思春期の変化」や「マスターベーション」、「月経・精通」などの第二性徴期における子どもの生理的側面の変化に関しての指導や、「友情・愛情」や「男女交際」、「妊娠」など将来の社会生活を見据えた指導内容が比較的多くみられた。指導実施上の困難を複数回答で尋ねた(表4)。「子どもたちの個人差が大きいから」が最も多く23名(62.2%)、次いで「学校の授業だけでは不十分」17名(45.9%)、「具体的な指導方法が不明

表1 性教育指導実施の有無とその頻度

実施していない	回数	人数	割合
実施していない		55	(55.6%)
実施している	週に1回	0	
	月に1回	0	
	学期に1回	8	
	年に1回	2	
	年に2回	5	42 (42.4%)
	不定期	7	
	機会を捉えて随時	19	
	未回答	1	
未回答		2	(2.0%)
合計		99	(100.0%)

表2 性教育指導を実施している理由

子どもに現在必要	26	(61.9%)
子どもに将来必要	25	(59.5%)
学部の教育方針	13	(31.0%)
自らの教育方針	6	(14.3%)
学校の教育方針	5	(11.9%)
保護者からの要望	3	(7.1%)
他教員からの要望	0	(0.0%)
その他	2	(4.8%)

n=42 (複数回答)

表3 性教育指導の実施内容

	小学部	中学部	高等部	合計	割合
清潔	15	18	8	41	(97.6%)
用便	15	11	7	33	(78.6%)
男女の違い	9	17	5	31	(73.8%)
体のしくみ	7	14	3	24	(57.1%)
思春期の変化	1	11	3	15	(35.7%)
お母さんと赤ちゃん	2	9	2	13	(31.0%)
マスターベーション	0	10	3	13	(31.0%)
友情・愛情	5	4	2	11	(26.2%)
月経	0	7	2	9	(21.4%)
精通	0	7	2	9	(21.4%)
性道徳	3	2	2	7	(16.7%)
男女の協力	1	2	3	6	(14.3%)
男女交際	0	3	2	5	(11.9%)
妊娠	0	2	2	4	(9.5%)
出産	0	2	2	4	(9.5%)
その他	3	0	1	4	(9.5%)
結婚	0	1	1	2	(4.8%)
性被害	0	1	0	1	(2.4%)
避妊	0	0	1	1	(2.4%)
性交	0	0	1	1	(2.4%)
中絶	0	0	0	0	(0.0%)
売春	0	0	0	0	(0.0%)
買春	0	0	0	0	(0.0%)
性病・エイズ	0	0	0	0	(0.0%)
遺伝	0	0	0	0	(0.0%)

n=42 (複数回答)

表4 性教育指導を実施する上での困難

子どもたちの個人差が大きい	23	(62.2%)
学校の授業だけでは不十分	17	(45.9%)
具体的な指導方法が不明確	12	(32.4%)
時間が十分にとれない	7	(18.9%)
十分な教材・教具がない	6	(16.2%)
教育課程への位置づけが難しい	1	(2.7%)
保護者の理解・協力が得られない	0	(0.0%)
他教員の理解・協力が得られない	0	(0.0%)
その他	5	(13.5%)

n=37 (未回答除く:複数回答)

確」12名 (32.4%) であった。

性教育指導の必要性：

性教育指導の必要性と指導の実施状況とをクロス集計した (表5)。指導を実施していない教師は「指導の必要はない」あるいは「どちらともいえない」が有意に多かった ($\chi^2=19.916$, $p=.000$)。実施していない理由を複数回答で尋ねた (表6)。「子どものたちの個人差が大きい」が20名 (40.8%) と最も多く、「具体的指導方法が不明確」は9名 (18.4%) であった。

学校内における子どもの

行動への感じ方と対応：

性にまつわる行動18項目を子どもが学校内で行った場合について、「困ったことだと思う」(1点)、「やや困ったことだと思う」(2点)、「どちらともいえない」(3点)、「あまり困ったことだと思わない」(4点)、「困ったことだと思わない」(5点)の5段階で評定してもらった。図1に、評定値 (平均値)

表5 性教育指導の実施状況と必要性

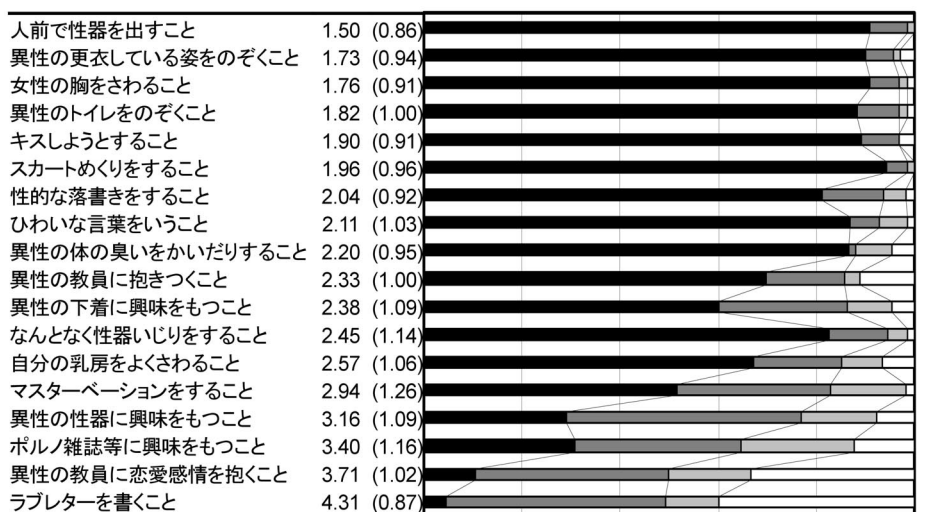
	実施している 実施していない	性教育指導の必要性		合計
		必要	不要 / どちらともいえない	
実施		37	2	39
状況		28	26	54
	合計	65	28	93

(未回答除く)

表6 性教育指導を実施していない理由

子どもたちの個人差が大きい	20 (40.8%)
実施のための時間がとれない	12 (24.5%)
子どもたちに必要がない	9 (18.4%)
具体的な指導方法が不明確	9 (18.4%)
教育課程へ位置づけられない	6 (12.2%)
学部の教育方針ではない	2 (4.1%)
十分な教材・教具がない	2 (4.1%)
学校の教育方針ではない	1 (2.0%)
自らの教育方針ではない	1 (2.0%)
保護者からの要望がない	1 (2.0%)
他教員からの要望がない	0 (0.0%)
保護者の理解・協力が得られない	0 (0.0%)
他教員の理解・協力が得られない	0 (0.0%)
学校の授業だけでは不十分	0 (0.0%)
本来は家庭で指導すべきもの	0 (0.0%)
問題行動の契機となるのでは	0 (0.0%)
その他	14 (4.8%)

n=49 (未回答除く:複数回答)



※ 数値は平均値 (括弧内は標準偏差)。
小さいほど「困ったことだ」と感じていることを表す。

■ その場で止めさせるための対応をする
 ■ その場では特に何もすることはないが、後で個別に性教育としての対応をする
 □ その場では特に何もすることはないが、後で保護者と相談する
 □ 特に何もすることはない

図1 子どもの行動に対する感じ方とそれへの対応

と、それら行動への対応（選択された割合）とを示した。「人前で性器を出す」や「異性の更衣している姿をのぞく」など他者の迷惑となる行為は強く困った行動と判断され、子ども自身に向けられた行動は困ったことではないと判断される傾向がみられた。さらに、強く困ったことと判断された項目ほど「その場でやめさせる」対応が多く、事後に「個別に性教育として対応する」ことが少ない傾向がみられた。

性教育指導の必要性と

子どもの行動への対応との関連：

「性教育指導の必要性」について、「必要である」と答えた教師（必要群）と「必要ではない」あるいは「どちらともいえない」と答えた教師（不要群）のそれぞれについて、子どもの行動に対する感じ方を表7に示した。各項目の平均値の差について一元配置分散分析を行ったところ、「異性の下着に興味をもつこと」と「ラブレターを書くこと」では、不要群が必要群よりも有意に困ったことだと判断した。また、「マスターベーションをす

ること」と「異性の性器に興味をもつこと」、「ポルノ雑誌等に興味をもつこと」の各項目では、不要群が必要群よりも有意に困ったことだと判断する傾向を示した。それぞれの群について、子どもの行動への対応の仕方を表8に示した。子どもの行動への感じ方の差が有意であった上記2つの項目では、対応の仕方にもそれぞれ違いがみられた。

表7 必要性の有無別にみた子どもの行動への感じ方

	必要群	不要群
人前で性器を出すこと	1.56 (0.93)	1.33 (0.58)
異性の更衣している姿をのぞくこと	1.74 (1.00)	1.71 (0.78)
女性の胸をさわること	1.78 (0.97)	1.71 (0.72)
異性のトイレをのぞくこと	1.90 (1.07)	1.62 (0.74)
キスしようとする	1.91 (0.95)	1.86 (0.79)
性的な落書きをすること	2.02 (0.94)	2.10 (0.89)
スカートめくりをすること	2.05 (1.01)	1.71 (0.78)
ひわいな言葉をいうこと	2.10 (1.09)	2.14 (0.85)
異性の体の臭いをかいだりすること	2.25 (1.03)	2.05 (0.72)
異性の教員に抱きつくこと	2.41 (1.07)	2.10 (0.77)
なんとなく性器いじりをする	2.51 (1.19)	2.27 (0.96)
異性の下着に興味をもつこと	2.54 (1.12)	1.90 (0.85) *
自分の乳房をよくさわること	2.61 (1.11)	2.48 (0.93)
マスターベーションをすること	3.09 (1.26)	2.52 (1.21) +
異性の性器に興味をもつこと	3.28 (1.07)	2.80 (1.11) +
ポルノ雑誌等に興味をもつこと	3.53 (1.17)	3.00 (1.03) +
異性の教員に恋愛感情を抱くこと	3.74 (0.99)	3.62 (1.12)
ラブレターを書くこと	4.45 (0.81)	3.90 (0.91) *

※ 数値は平均値、小さいほど「困ったことだ」と感じていることを表す。
 ※ ()内は標準偏差 + p<.10 * p<.05

表8 必要性の有無別にみた子どもの行動への対応

	必要群					不要群				
	A	B	C	D	(n)	A	B	C	D	(n)
人前で性器を出すこと	87.8	10.2	2.0	0.0	(49)	100.0	0.0	0.0	0.0	(17)
異性の更衣している姿をのぞくこと	90.4	7.7	0.0	1.9	(52)	88.2	0.0	5.9	5.9	(17)
女性の胸をさわること	90.0	8.0	0.0	2.0	(50)	93.8	0.0	6.3	0.0	(16)
異性のトイレをのぞくこと	84.3	11.8	2.0	2.0	(51)	100.0	0.0	0.0	0.0	(17)
キスしようとする	87.8	10.2	0.0	2.0	(49)	93.8	0.0	0.0	6.3	(16)
スカートめくりをすること	92.5	5.7	1.9	0.0	(53)	100.0	0.0	0.0	0.0	(17)
性的な落書きをすること	78.7	14.9	4.3	2.1	(47)	88.2	5.9	5.9	0.0	(17)
ひわいな言葉をいうこと	84.6	7.7	5.8	1.9	(52)	94.1	0.0	5.9	0.0	(17)
異性の体の臭いをかいだりすること	83.7	2.0	8.2	6.1	(49)	94.4	0.0	5.6	0.0	(18)
異性の教員に抱きつくこと	66.0	19.1	2.1	12.8	(47)	81.3	6.3	6.3	6.3	(16)
異性の下着に興味をもつこと	53.1	32.7	10.2	4.1	(49)	81.3	6.3	6.3	6.3	(16)
なんとなく性器いじりをする	78.6	16.1	3.6	1.8	(56)	94.7	0.0	5.3	0.0	(19)
自分の乳房をよくさわること	60.0	22.2	11.1	6.7	(45)	87.5	6.3	0.0	6.3	(16)
マスターベーションをすること	50.0	35.4	12.5	2.1	(48)	56.3	18.8	25.0	0.0	(16)
異性の性器に興味をもつこと	24.0	52.0	14.0	10.0	(50)	46.7	33.3	20.0	0.0	(15)
ポルノ雑誌等に興味をもつこと	26.0	42.0	20.0	12.0	(50)	46.7	6.7	33.3	13.3	(15)
異性の教員に恋愛感情を抱くこと	12.5	43.8	12.5	31.3	(48)	5.6	27.8	27.8	38.9	(18)
ラブレターを書くこと	4.1	51.0	12.2	32.7	(49)	6.3	25.0	6.3	62.5	(16)

- A その場で止めさせるための対応をする
- B その場では特に何もすることはないが、後で個別に性教育としての対応をする
- C その場では特に何もすることはないが、後で保護者と相談する
- D 特に何もすることはない

4) 考 察

実施している割合が4割強と少ないが、その指導内容は「体のしくみ」や「月経」、「精通」といった「セックス教育」に相当するものと、「友情・愛情」や「男女の協力」といった「セクシャリティ教育」に相当するものとの両面にわたるものであった。しかし実施に際して、知的障害がある子どもたちの個人差の問題が大きく、それらによって具体的な指導内容および方法の確立に困難を抱えていることが未だ現状であることが確かめられた。

指導を実施していない教師の半数近くが性教育指導の必要性を肯定できておらず、性教育指導を実施することに対する現場教師の戸惑いが伺われる。この背景として、上述した子どもの個人差と指導内容・方法の問題とともに、指導を実施している教員の回答に多い「学校だけでは不十分」であるという実情もあるものと考えられる。それゆえ、実際の性教育指導に際しては、やはり家庭との連携を前提とした生徒一人ひとりに対する個別的な配慮・指導が必要であるとともに、クラス全体での一斉指導という指導形態のみでは、知的障害養護学校において性教育指導を行うことの難しさを示すものと考えられる。

子どもの性的行動をどのように捉え、どう対応するかは、性的なことに関する教員個人の価値観に左右される。結果からは、性教育の必要性を肯定できない教員は、子どもの行動のいくつかを、必要性を肯定する教員よりも強く困ったことと判断する傾向を示しており、その後の対応についても異なる傾向がみられた。すなわち、子どもの種々の行動をいわゆる“性衝動”として性的発達の自然な表われとみるか、あるいはいわゆる“性行動”として公共の場においての問題行動として捉えるかによって、性教育指導の必要性についての認識が異なるものとなると考えられる。本研究では、子どもの性的行動を評定してもらった際に、その評定の理由を尋ねることは

しなかった。評定の理由を併せて検討することにより、上記した点、すなわち、子どもの行動をどういった理由で問題行動として捉え、それがさらに具体的にどのような対応・指導へとつながるものとなるのかを明らかにすることが必要であろう。

子どもの性的行動の捉え方と対応において個々の教員間に差異があるということは、子どもが自らの行動が持つ社会的意味を認識するのに重要な影響力を持つであろう。これらを教員間で一致させ、対応のあり方を一貫していくことは、特に知的障害児に対する教育方法としては重要ではないだろうか。

II. 調査 2

1) 目 的

調査2では、卒業後に学校教員となることを目指す現役の大学生が学校教育における性教育の必要性をどのように認識し、どのように実施しようと考えているかを明らかにする。さらに、調査1で対象とした現職の養護学校教員と比較することにより、知的障害児に対する性教育のあり方の認識にはどのような差異があるのかを検討する。これらをもとに、大学の教員養成課程における性教育指導法に関するカリキュラムの必要性について考察する。

2) 方 法

対象と手続き：

北星学園大学で2004年度に教育実習を履修する3年次以上の学生276名を対象とした。2004年4月に質問紙調査を実施した。質問紙は「教育実習」の授業内にて全履修者（出席者）に配布し、大学構内に期間内常設したポストに任意に投函してもらった。114名から回収され（回収率41.3%）、全てを分析対象とした。内訳は男子学生28名（3年次17、4年次8、その他3）、女子学生85名（3年次

35, 4年次47, その他3), 性別・学年不明1名であった。取得希望の教員免許状は述べ数で中・高英語79名, 中・高社会(公民・地歴含む)58名, 高校福祉29名, 養護学校18名, その他10名であった。なお, 比較のための知的障害養護学校に勤務する現職教員99名の結果は, 調査1にて述べたとおりである。

質問内容:

質問紙は, 「対象者の個人属性」, 「学校教育における性教育の必要性」, 「知的障害を持つ子どもへの性教育」, 「知的障害児とのかかわり経験」の4つの領域, 全99項目からなった(資料2参照)。

3) 結果

学校教育における性教育の必要性:

114名中109名(95.6%)が学校教育において性教育は「必要である」と答えた(男子28名100%, 女子81名95.3%)。このうち「性教育が必要な理由」としては, 「正しい知識を教えるため」が男女とも最も多く, 次いで男子では「さまざまな性の問題行動がある」, 女子では「生命の尊さを教えられる」が多かつ

た(表9)。「指導の内容」それぞれについて, 自分がもし教師であるならば行うであろう「指導の形態」を尋ねた。男女とも「用便」, 「マスターベーション」では「特に指導する必要はない」, 「必要な子どもたちに個別指導する」が多く, その他の内容では「授業などで集団指導をする」が60%程度以上であった。このうち, 「男女の協力」($\chi^2=12.161$, $p=.002$), 「体のしくみ」($\chi^2=8.960$, $p=.011$), 「避妊」($\chi^2=6.464$, $p=.039$), 「出産」($\chi^2=7.260$, $p=.027$)では, 女子で有意に「集団指導」が多かった。またこれらの「指導の内容」について, それぞれを実際に「指導する自信の程度」を, 「指導する自信がある」(1点), 「やや指導する自信がある」(2点), 「どちらともいえない」(3点), 「あまり指導する自信がない」(4点), 「指導する自身がない」(5点)の5段階評定で尋ねた。ほぼ全ての「内容」で男女とも平均すると2.5前後であり, 指導する自信がわずかにある程度であった(表10)。ただし「お母さんと赤ちゃん」($\chi^2=15.391$, $p=.004$)と「月経」($\chi^2=24.264$, $p=.000$)では男子が, 「精通」($\chi^2=19.049$, $p=.001$)と「マスターベーション」($\chi^2=$

表9 知的障害児に対する性教育が必要な理由(現職員)と学校教育において性教育が必要な理由(学生)

	現職教員		学生	
	男性	女性	男性	女性
正しい知識を教えるために	3 (13.0)	5 (16.1)	11 (42.3)	33 (43.4)
さまざまな性の問題行動があるから	1 (4.3)	2 (6.5)	5 (19.2)	7 (9.2)
生命の尊さを教えられるから	0 (0.0)	1 (3.2)	2 (7.7)	10 (13.2)
性の被害者とならないために	1 (4.3)	0 (0.0)	2 (7.7)	3 (3.9)
情報を得ることが少ないから	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (7.7)	2 (2.6)
男女の相互理解・尊重を教えられるから	1 (4.3)	2 (6.5)	1 (3.8)	7 (9.2)
将来的に性的自立が必要であるから	4 (17.4)	1 (3.2)	1 (3.8)	5 (6.6)
全人的な発達を促すために	7 (30.4)	7 (22.6)	1 (3.8)	2 (2.6)
子どもに性的な発達がみられるから	4 (17.4)	10 (32.3)	0 (0.0)	3 (3.9)
生き方を教えられるから	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (2.6)
子どもが性に関心を持つから	1 (4.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.3)
その他	1 (4.3)	3 (9.7)	1 (3.8)	1 (1.3)
合計	23 (99.7)	31 (100.1)	26 (99.8)	76 (99.8)

()内は%:少数第二位を四捨五入のため合計が100%とならない

表10 学校教育において指導を実施する自信の程度

	男子学生	女子学生
用便	2.62(1.39)	2.61(1.04)
清潔	2.33(1.21)	2.23(0.93)
お母さんと赤ちゃん	2.85(1.20)	2.18(0.91)
男女の違い	2.22(0.93)	2.44(1.07)
男女の協力	2.46(1.04)	2.19(1.03)
思春期の変化	2.39(1.10)	2.59(1.03)
月経	3.07(1.33)	2.12(0.89)
精通	2.25(1.18)	3.32(1.26)
体のしくみ	2.25(1.14)	2.49(1.04)
性被害	2.29(1.08)	2.58(1.14)
男女交際	2.39(1.03)	2.70(0.95)
マスターベーション	2.18(1.19)	3.72(1.12)
妊娠	2.46(1.23)	2.30(1.17)
避妊	2.29(1.33)	2.30(1.16)
中絶	2.48(1.25)	2.47(1.15)
出産	2.50(1.23)	2.43(1.15)
性交	2.54(1.14)	2.91(1.13)
売春	2.52(1.25)	2.81(1.17)
買春	2.61(1.23)	2.88(1.18)
性病・エイズ	2.36(1.10)	2.35(1.09)
遺伝	2.89(1.25)	2.77(1.21)
結婚	2.56(0.97)	2.56(1.14)
友情・愛情	2.39(1.17)	2.24(1.09)
性道徳	2.57(1.10)	2.65(1.12)
その他	2.60(0.89)	2.40(1.58)

※ 値は平均値が小さいほど指導する自信があることを表す
 ※ ()内は標準偏差

33.275, $p=0.000$) では女子が、それぞれ有意に「あまり自信がない」と「自信がない」を多く選択する傾向がみられた。性教育を開始すべき年齢を尋ねた(表11)。学生は男女とも「小学校中学年から」開始すべきとの回答が最も多かった。特に男子学生では、「中学校から」が比較的多かった。

知的障害を持つ子どもへの性教育について：
 学校内での知的障害児の行動についてどのくらい「困ったことだと思う」かを5段階評定してもらった(表12)。5段階評定の尺度は調査1と同様である。男女別に現職教員と比較したところ(対象と性別の二元配置分散分析)、「異性の下着に興味を持つこと」で学

表11 性教育を開始すべき年齢

	現職教員		学生	
	男性	女性	男性	女性
小学校低学年から	18(69.2)	24(66.7)	5(17.9)	14(17.3)
小学校中学年から	4(15.4)	1(2.8)	10(35.7)	35(43.2)
小学校高学年から	3(11.5)	10(27.8)	7(25.0)	25(30.9)
中学校から	1(3.8)	0(0.0)	6(21.4)	6(7.4)
高等学校から	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
その他	0(0.0)	1(2.8)	0(0.0)	1(1.2)
合計	26(100.0)	36(100.0)	28(100.0)	81(100.0)

()内は%

表12 子ども行動を困ったことと思うか

	学生		現職教員		対象	性別	交互作用
	男性	女性	男性	女性			
なんとなく性器いじりをする	2.86(1.08)	2.00(0.81)	2.40(1.06)	2.50(1.20)	n.s.	n.s.	**
ひわいな言葉をいう	2.25(1.11)	1.92(0.90)	2.09(0.95)	2.09(1.02)	n.s.	n.s.	n.s.
スカートめくりをする	2.36(1.19)	2.12(1.03)	1.76(0.74)	2.13(1.08)	n.s.	n.s.	n.s.
マスターベーションをする	1.96(1.43)	1.82(1.10)	2.76(1.23)	3.07(1.29)	**	n.s.	n.s.
異性の体の臭いをかいだりすること	2.18(0.86)	2.05(1.02)	1.91(0.71)	2.40(1.06)	n.s.	n.s.	*
異性の胸をさわること	1.71(0.94)	1.53(0.74)	1.42(0.56)	2.04(1.03)	n.s.	n.s.	**
キスしようとする	1.96(1.04)	1.65(0.83)	1.56(0.62)	2.17(1.00)	n.s.	n.s.	**
異性の更衣している姿をのぞく	1.68(0.82)	1.65(0.76)	1.52(0.71)	1.93(1.06)	n.s.	*	*
異性の下着に興味をもつ	2.86(1.11)	2.86(1.21)	2.09(0.91)	2.64(1.14)	*	n.s.	n.s.
異性のトイレをのぞく	1.50(0.75)	1.65(0.92)	1.45(0.56)	2.13(1.15)	n.s.	**	*
ポルノ雑誌等に興味をもつ	3.75(0.97)	3.36(1.09)	3.18(1.21)	3.58(1.08)	n.s.	n.s.	*
人前で性器を出す	1.43(0.79)	1.33(0.75)	1.35(0.65)	1.65(0.99)	n.s.	n.s.	n.s.
性的な落書きをする	2.36(0.99)	2.12(0.99)	1.81(0.75)	2.25(0.99)	n.s.	n.s.	*
ラブレターを書く	4.46(0.79)	4.47(0.86)	4.23(0.81)	4.36(0.92)	n.s.	n.s.	n.s.
自分の乳房をよくさわること	2.96(1.23)	2.54(1.02)	2.35(0.88)	2.76(1.12)	n.s.	n.s.	**
異性の性器に興味をもつ	3.50(1.00)	3.20(1.16)	2.91(0.93)	3.33(1.17)	n.s.	n.s.	*
異性の教員に抱きつく	2.86(1.04)	2.80(1.06)	1.97(0.72)	2.63(1.08)	**	*	*
異性の教員に恋愛感情を抱く	3.61(1.17)	3.19(1.16)	3.56(1.05)	3.82(1.00)	n.s.	n.s.	*

※ 数値は平均(括弧はSD)、小さいほど「困ったことだと思う」と評定された。

** $p<0.01$ * $p<0.05$

生が現職教員よりも有意に「困ったことではない」とし、「マスターベーションをする」では学生が現職教員よりも有意に「困ったことである」とした。18項目のうち12項目において対象と性別との交互作用が有意であった。上記の2項目では、「対応の仕方」にも差があり、男女学生とも「マスターベーションをする」は「止めさせる」対応が有意に現職教員よりも多く、「異性の下着に興味を持つこと」では女子学生が、現職の同性教員よりも有意に「何もしない」対応が多かった。18項目中10項目では学生と現職教員とで「対応の仕方」に有意差はみられなかった。

4) 考 察

結果から、教職志望学生は学校教育において性教育を実施することの必要性を強く認識しているながら、自分が実際に指導を行うと仮定されるとその実施にあまり自信がない様子が伺われる。知的障害養護学校の現職教員では、男女教員ともおよそ70%が（知的障害児に対する）性教育は必要であるとし、その理由として「全人的な発達を促すため」、「子どもに性的な発達がみられるから」としていた（表9参照）。このように現職教員は少なくとも知的障害児に対する性教育を「セクシャリティ教育」として、子どもの様々な性的な発達に対処しつつも性教育を広く人間教育として捉えようとする意識が伺われる。これに対し、現役大学生は、性教育とは性にまつわる事柄についての正確な知識を身に付けさせることが重要であり、子どもの性的発達を待つて開始すべきという旧来の「セックス教育」的意識であることが伺われる。ただしこの結果は、知的障害児に対する性教育とは特に限定していない大学生と、あくまでも現に教育実践を行っている知的障害児に対する性教育について回答した現職教員との比較であるため、「障害児観」といった他の要因が影響していることも考えられる。

知的障害を持つ子どもへの性教育についての結果からは、知的障害児の性的行動についての現職教員と大学生の感じ方や対応には若干の差がみられたものの、多数の行動においては有意な差がみられなかった。このことは、知的障害児への性教育指導を実践的にも理論的にもほとんど学んだことのない大学生の捉え方・対応と、学校教育現場において日々教育実践を行っている現職教員の捉え方・対応とは大差がないということの意味している。しかし、現職教員たちも彼らが学生時代に大学の教員養成カリキュラムにおいて知的障害児に対する性教育指導法を履修した経験をもつものはいないものと思われる。さすれば、現在性教育の指導法について何らの教育をも受けていない現役大学生が将来的に教員となったときには、現職教員が現在抱えている課題、つまり知的障害児の性的行動にどう対応し、どのように性教育指導を実施するかということに不安と戸惑いを覚えるようになるであろうことが容易に推測できる。ただし、多くの行動の捉え方において対象と性別との間に交互作用がみられたことから、例えば大学生が教員となっていくとしたときに、子どもの性的行動をどのように捉えるようになるのかは、男女で違いがあることが推察される。この差異は、幼少期からのしつけや教育経験によって培われた男女の性的価値観の差異とも考えられるが、この点については今後検討していくことが必要であろう。

以上のことから、大学の教員養成課程においては、性教育を単に性にまつわる知識の授受としてのみ捉えるのではなく、広く人間教育として捉えることのできる性教育観を養いつつ、加えて学校教育における実際の指導場面に即した性教育指導法をも包含した性教育法を設置することが早急に必要であるといえる。ただし、そのカリキュラム内容および教授法については、さらに検討を積み重ねることが必要であり、また急務であるともいえよう。

おわりに

知的障害児に対する性教育は、未だ具体的な教育内容や方法が不明瞭であり、現職の養護学校教員は日々戸惑いながらも教育実践を続けているのが現状である。本研究においてもこの点が確認された。これら学校教員は、これまで高等学校、中学校、小学校といった学校教育において何らかの性教育指導を受けてきているはずである。しかし、本研究でも明らかのように、実際に子どもに対して性教育を実施することには少なからぬ自信のなさが観察されている。このことは、知的障害児に対する性教育指導のあり方を検討することの重要性とともに、健常児に対する性教育指導のあり方を、さらには大学生に対する性教育指導のあり方をもまた同時に検討していくことの必要性を示唆するものと考えられる。

〔注〕

- (1) 本研究の結果の一部は、日本特殊教育学会第41回大会（2003年東北大学）、および同第42回大会（2004年早稲田大学）にて発表された。
- (2) 調査1の資料は、本学2002年度卒業生である金澤裕衣さんが卒業論文の作成過程において収集したものの一部である。資料のご提供に記して感謝いたします。

文 献

- 江田裕介・田川元康・松本美穂（2000）障害児の性および性教育に対する教師の意識。上越教育大学障害児教育実践センター紀要，6, 19-27.
- 石原昌江・早川奈津江（1993）養護教諭養成課程における性教育についての研究（第2報）。岡山大学教育学部研究集録，92, 151-158.
- 石井眞治・若尾裕・神山貴弥（1992）教員養成系大学における性教育実践の効果に関する研究。広島大学教育実践研究指導センター紀要，4,

21-31.

- 木戸久美子・林隆・吉田一成（1998）発達障害児に対する性教育の現状－指導者の性に関する意識・関心と指導内容の関係－。研究論叢 第3部 芸術・体育・教育・心理（山口大学教育学部），48, 271-282.
- 木村龍雄・尾原喜美子（1998）障害児学校の性教育に対する教師の意識－養護・聾・盲学校の全国的調査－。高知大学教育学部研究報告 第1部，55, 147-158.
- 児嶋芳郎・越野和之・大久保哲夫（1996）知的障害児の性教育に関する一考察－養護学校全国的調査より－。奈良教育大学紀要，45(1), 201-217.
- 前田利久（1997）知的障害のある子どもの性に関する指導プログラムについての一考察－先行研究の状況と養護学校（知的発達障害）高等部における調査を通して－。平成8年度 国立特殊教育総合研究所 長期研修成果報告書。
- 益子詔次（2002）大学における授業実践「青年期と性」について－双方向の授業づくりをめざして－。宇都宮大学教育学部 教育実践総合センター紀要，25, 213-225.
- 日本性教育協会（1990）性教育 新・指導要項解説書。小学館，p52.
- 尾原喜美子・木村龍雄（1998）障害児学校における性教育の現状と課題－養護教諭を対象とした養護・聾・盲学校の全国的調査－。高知大学教育学部研究報告 第1部，55, 133-145.
- 武田敏（1979）大学教育における性教育指導者養成。学校保健研究，21(3), 111-117.

資料1 調査1における質問内容（選択肢等は省略）

「対象者の個人属性」

- ・ 性別
- ・ 年齢
- ・ 所属 学部／所属学年
- ・ 教職経験年数／障害児教育経験年数

「性教育指導の実施状況」

- ・ 現在、あなたのクラスでは授業として「性教育」を実施していますか。
- ・ どのくらいの頻度で実施されていますか。
- ・ どのような形態で実施されていますか。
- ・ 実施されている理由はどのようなことですか。／実施されていない理由はどのようなことですか。／今後、授業として性教育を実施したいと思われませんか。またその理由はどのようなことですか。
- ・ 授業では具体的にどのような内容を取り上げていますか。
- ・ 授業を実施する上でどのような困難を感じられますか。

「性教育指導の必要性」

- ・ 知的障害養護学校の中で、あなたが所属されている学部では一般的に性教育をする必要があると思われませんか。
- ・ 必要であると思われる理由はどのようなことですか。／必要ではないと思われる理由はどのようなことですか。／「どちらともいえない」とお答え頂いた理由はどのようなことですか。
- ・ あなたの所属する学部で一般的に性教育を行うとしたら、以下の内容についてどのように取り上げることがよいと思われませんか。
- ・ 本来、いつ頃から性教育を始めることがよいと思われませんか。

「子どもの行動への対応」

- ・ あなたのクラスの子どもたちが、学校内で次のようなことをしたとき、どのように思われますか。
- ・ また、それぞれについてどのような対応をされますか。

「障害者の性について」

- ・ （障害者の性に関する）次のことがらについて、それぞれ適当と思われる数字に○をつけて下さい。

資料2 調査2における質問内容（選択肢等は省略）

「対象者の個人属性」

- ・ 性別
- ・ 年齢
- ・ 所属学科
- ・ 所属学年
- ・ 取得希望免許
- ・ 取得済みの教員免許

「学校教育における性教育の必要性」

- ・ 学校教育の中で、性教育をする必要があると思われますか。なお、ここでいう「学校教育」とは小学校・中学校・高等学校における教育のことです。
- ・ 必要であると思われる理由はどのようなことですか。／必要ではないと思われる理由はどのようなことですか。／「どちらともいえない」とお答え頂いた理由はどのようなことですか。
- ・ もしあなたが学校教育の中で「性教育」を行うとしたら、以下の内容についてどのように取り上げることがよいと思われますか。
- ・ その内容について、あなたはどのくらい指導を実施する自信がありますか。
- ・ 本来、いつ頃から性教育を始めることがよいと思われますか。

「知的障害を持つ子どもへの性教育」

- ・ もしあなたが担当するクラスに知的障害を持つ子どもがおり、学校内で次のようなことをしたとしたら、どのように思われますか。
- ・ また、それぞれについてどのような対応をされますか。

「知的障害児とのかかわり経験」

- ・ あなたはこれまで知的障害を持つ子どもたちと、どのようなかかわりをもったことがありますか。